



故 菊地宏助教授追悼録

菊地宏先生の早世を悼む 松浦良平

謹んで故福岡女子大学助教授菊地宏先生の御霊前にお別れの言葉を捧げます。

先生は、この四月アメリカ合衆国エール大学へ福岡県海外派遣研究員として留学し、希望に燃えて研究生活に入つたのでありました。勇躍福岡を出発した時のお姿が眼に浮んで離れません。しかるに、渡米わずか三ヶ月にして病におかされ、止むなく帰国して治療につとめられたのであります。奥様はじめ御家族皆さまの懸命の看護も甲斐なく、十月十日の朝お亡くなりになりました。今日このような形で先生に永遠のお別れをしなければならなくなつたのは、まことに歎きても余りある悲しいことであります。

先生は昭和十八年二月、広島県に於て生を受け、岩手県

立水沢高等学校、早稲田大学第一政治経済学部を経て、東北大学大学院に学ばれ、昭和四十七年三月法学研究科博士課程三ヶ年を終えられました。同四月から東北大学法学部助手になられ、法学、政治学の研究と教育に従事されました。昭和五十一年四月に、福岡県公立学校教員に任命されて県立福岡女子大学講師に補され、翌五十二年十二月に助教授に昇進されて現在に至りました。この間文学部一般教育課程に所属して、日本国憲法、法学、政治学及び社会思想史の科目を担当され、学生に対する教育に熱心につくしてこられました。研究上は、福岡女子大学に於て、特に、立憲主義の立場から戦前の日本の政治をたえず批判し続けた政治家齋藤隆夫や、先駆的業績を残した歴史学者であり、希有の国際的知識人であった朝河貫一 の思想とその主張に興味をいただき、広く国内、国外の文献、文書を調査研究されました。その業績はまことに大きなものがあります。今回の米国留学に於ても、エール大学図書館に毎日通つて調査を行い、その調べた文書はマイクロフィルムとして複写

し、帰国後も引き続きこの研究を推進する条件を整えておられました。不幸病を得て中途帰国を余儀なくされましたが、帰国後も病床にあって気力を振りしぼって、その研究のまとめにつとめられ、最後まで著書として出版する準備をされておりました。研究に対するその強い意欲と、烈しい情熱に対しては、全く頭の下がる思いがいたします。

先生は福岡女子大学に於て教育と研究に従事するかたわら、学生部委員、教務委員、図書委員等の役職をつとめられ、大学の管理運営にも大きな功績を残されました。大学として感謝に堪えないところであります。

先生はたいへん率直かつ誠実であり、その人柄は同僚の尊敬するところでありました。教授会に於ても積極的に発言され、活発な議事進行につとめられました。また東北人特有の粘り強さを持って相手の説得に手腕を発揮されました。しばしば野草採取に出かけられ、その新鮮な芽を食卓に載せて、われわれ同僚を接待してくれました。その素朴な味は、先生の性格にぴったりであり、楽しい団らんの時を過ごしたものでありました。その席には、いつも奥様の甲斐甲斐しいお姿が見られました。このようなことも、突如として消え失せてしまいました。最愛の奥様や可愛いお子様をのこして、またわれわれ同僚を残して、先生はあの世に先立ってしまいました。何という悲しいことであり

ましよう。

先生はまだ四十五才の若さであります。これから、先生の学者としての人生が開くところでありました。先生の無念さはいかばかりでありましよう。福岡女子大学としても惜しみても余りある人を失いました。国のためにもこの有爲の人材を亡くしたことは大きな損失であります。

しかし、菊地先生、後に続く者が先生の教えを生かして、必ずや大きな仕事をしてゆくことを信じて疑いません。どうか天上にあってお見守り下さい。先生の霊の安らかなことをお祈りして、弔辞といたします。

(本学学長。本稿は葬儀に際し弔辞として寄せられたものである。)

菊地君を偲ぶ

内藤 俊彦

菊地君の訃報を聴いた時には、暫らく声が出ませんでした。私の中の大切な何かが決定的に欠落してしまったという感じでした。九月末に京都の病院に見舞った時は、体力的な衰弱は止むを得ないとして、精神的にはとても確りしている様に見え、何時もと変わらない調子で話したのでした。菊地君も奥様も、とても穏やかな様子をして居られたのが印象的でした。

私達は一九六七年に仙台で出会いましたが、それから五年間、多くは酒を飲みながら、毎日の様に議論をしました。そこで私は近代日本思想を如何に捉えなければならぬかについて、基本的な考え方を彼から学んだと思います。彼に出会うまで、私は思想の捉え方において極めて幼稚でしたし、此の点は今でも進歩しているとは言えません。彼の前に慚愧に堪えない次第です。しかし、私の幼稚な意見に彼は実に寛大に耳を傾け、率直的確な意見で私の蒙を啓いて呉れました。尤も、彼の考えを理解出来た様に思うのは別れて数日後という事がしばしばありました。その意味で私は極めて不敏な友人でした。

菊地君は、修士論文で北村透谷を取り上げましたが、このテーマは彼が大学院に進学する以前から温めていたものでした。ここで彼は近代日本における自我意識の芽生えとその余りに早い夭折を論じました。そして助手論文では中江兆民を論じて、兆民が彼の思想的課題の解決を回避し続けていた事を仮借せず明らかにしました。この二つの論文で彼が目指していたのは、近代日本における思想の自立性の欠如を明らかにする事、換言すれば、近代日本において思想の自立性を確保するための諸条件の模索であったと思います。彼はこの作業を鋭い論理と柔軟な感性で遂行しました。そしてその作業は同時に、透谷・兆民に対して彼自

身が思想的に対決する事であり、そしてまた、彼らの思想に関する通俗的・権威的な解釈に対する果敢な挑戦でもありました。その後発表された徳富蘇峰論にも此等の点は一貫していたと思います。

私は彼の作品を読む度に、その論理の鋭さの余り、彼の論理の事実による裏付けが若干手薄になり、読む人に無用な誤解（或いは、理解の拒否…それは、彼の兆民論に対する高名な「思想史家」の論難に典型的に現われている）を与えるのではないかと危慮していたのですが、彼が数年前から大正・昭和期の議会政治家齋藤隆夫に関する史料の蒐集と聞き取り調査に打ち込んでいる様子を会う度に聴いて、私は彼の違った一面を見るように感じていました。彼がどのような観点から齋藤隆夫に関心を抱いたのかについては聴かず仕舞いでしたが、会う度毎に興味深い話を聴かせて貰いました。朝河貫一への関心もそこから派生してきたもの様に察せられました。今回のイェール大学への留学はこのような調査の仕上げを意味するものだったと思います。帰国後彼が書く独創的な齋藤隆夫像を読む事を私は期待していました。それは何よりも、彼の鋭く透徹した論理性が、集積された事実の重みをも組み敷く力強さを我々に開示して呉れることになる事への期待でした。しかし、彼は彼の齋藤隆夫論を持ったまま我々の前から突然去ってしまいま

した。何という痛恨事でしょう。それ以上に、彼はどんなにか無念だった事でしょう。

私は、専門の事柄についての私の未熟な考えに対して率直な意見を聴かせて呉れる唯一人の友人を喪ってしまいました。これから私は、何か問題に遭遇する度に、菊地君ならどの様に判断しただろうかと考えながら、自己修正を重ねていかなければなりません。そしてその度に彼の不在の寂しさを感じ続けるでしょう。

(新潟大学教授)

菊地宏さんのこと

望月俊孝

こんな限られた紙面に、いったい何を書けばよいのか。一九八八年十月十日午前六時六分。あれからまだそんなに日数もたっていないというのに、いったい何が書けるというのか。一時の慌ただしさも峠を越し、日々の生活がようやく平靜をとり戻したかに見えても、実際にはそのこと何ひとつとして消化しきれていないのであって、こうしてひとり筆をとり、菊地さんのことを思い返そうとすると、こころの乱れをどうしようもない。

さりとてこのことは、どだい消化しきれるような事柄ではないのだ。それに、私のなかには、菊地さんのことで書きたいと思うことが、確かにいっぱい詰まっている。そう

である以上、ここはひとつ、へんに身構えずに、いまころに思い浮かぶそのままを、素直に書きつらねてみることにしよう。

女子大に赴任して私はまだ二年目の身である。したがって菊地さんと接することのできた期間も、決してそう長いものとはいえない。しかしその間に、菊地さんは数え切れないほどの思い出を僕にあたえてくれた。官舎の菊地さん宅の庭には、春になると、それはみごとに桜が花開く。その桜のもと、毎年恒例になっていた花見の宴に、赴任早々の私もお招きにあずかった。そしてしこたま飲んだ。秋には、その庭の菊地さんお手製のかまどで、みんなして鮎やさんまを焼いた。暮れには、これも恒例のもちつきをして、そのあと庭から立派な山芋を掘り当て、またまた美酒をあおった。そのいずれもが混じりっ気ひとつなしに楽しい思い出だったし、その折々に見せる菊地さんの少々いたずらっぽい笑顔が、僕はとても好きだった。

しかしたんに楽しいだけにはとどまらない。菊地さんときあう人間は、現実に対し疑念を抱き、憤りを覚えないではいられなくなる。その現実とは、自分の身の回りの現実であり、また社会の現実である。私はそれまで十年近く京都に哲学を学び、ただひたすらカントにかじりついてきた。だからといって私はそれほど現実に疎かったわけでも

なく、むしろ自分が現実に抱え込んでしまった問題に対し、そこになんらかの手応えを感じえたからこそ、日々をカントの研究に費やしているつもりでいた。しかしそれも所詮はたんなるカント研究にとどまっていたようだ。実際、本学で「道德教育の研究」の講義を担当することになって、はたと困ってしまった。そしてその困惑のあげくに思いついたことといえば、歴史上の思想家の道德観なり教育観なりを紹介して、お茶をにごす程度のものであった。そんな私があまりたびたび愚痴をこぼすものだから、見るに見かねたのだろうか、ある日菊地さんは、「そういえばこんなものがありました」と言いながら、分厚い紙包みを手渡してくれた。それには、二通のかなり長文の手紙のコピーが入っていた。それは、娘さんの通う中学校で、かつて日常的な体罰が横行していたころ、その中学校に奥さんと二人で送り付けたものであった。菊地さんのその文章に接してしまったばかりに、私は以後「道德教育」の講義では、体罰・校則の問題を、また「哲学」「倫理学」でも、原子力発電に象徴されるテクノロジーの問題や、南アフリカのアパルトヘイトの問題を、とりあげざるをえないはめになった。少々私事にもわたることに字数を費やしてしまったが、これも実は、病床にあって吐かれた菊地さんのある言葉が、私の胸の奥にいまも強く響いているからである。

菊地さんは留学先のアメリカで不治の病を宣告され、やむなく帰国の後は、縁あって京都の府立医大病院において、闘病の日々をすごされた。しかしそんなことになっても菊地さんは、じめじめとした暗さのみじんも人に見せず、また奥さんやお子さんたちも努めて明るくふるまってもらった。そんな菊地さん一家がそうさせるのであろう、担当の医師も親身の治療に努めてくれたし、菊地さんもその若い医師をことのほか気にいっておられた。そんな懸命の治療のかたわら、「病氣のことを考えてるよりは気が楽だから」などと言って、菊地さんは、疼く痛みをこらえつつ仕事をされた。まず手初めに「若書き」の透谷試論に手を加え、他の論文と併せて一冊の本にまとめ、さらに時間が許せば、最近ずっと手掛けてきた斎藤隆夫についても論文にまとめたい。そんな計画だった。

菊地さんの透谷論は、この春アメリカに出発される直前に、「一年間の宿題」としてすでに手渡されていた。私はそれを改めて読み返した。透谷は一八九四年、廿五歳の若さで自殺する。若い菊地さんは、透谷の苦悩の生とその情熱の発露たる彼の言葉に共鳴し、であるがゆえにまた、彼の死を克服しなければならなかったという。菊地さんの力強い大部の論文には、そうした思いが行間に滲み出ている。しかしながら、いや、だからこそ、この論文を読み解く作

業は、いま現在死病と闘いつつ、なおも仕事を続けようとする菊地さんの姿を思うとき、正直いつてかなりつらいものであった。

透谷はごく若くして、疲弊する農村の現実を見てしまう。この「外的不幸」は、ミナとのラブを通じて「内心の苦悩」へと転化し、以後の文学活動のなかで、「円筒形の怨嗟の壁に囲まれた牢獄」を形成してゆく。それは透谷の「リアリズムの眼」ゆえの牢獄であり、またその牢獄ゆえに透谷は「観念的飛翔」を企てる。ここに透谷のリアリズムと観念性とのアンビヴァレンツがある。透谷は、その観念性の極みにおいて牢獄を出ようとし、そのことの無意味のなかで、自ら死を選ぶ。これに対し菊地さんは、透谷に再び牢獄に立ち戻り、そこに踏み止どまるよう求める。

八月のある日京都の病院の個室に立ち寄ったおりに、この論文について、菊地さんと三時間の長きにわたって語る機会を得た。話題は透谷のそのアンビヴァレンツに集中した。ひとしきり論じたのち、私は改めてその問題の重さに戸惑いを覚え、苦しまぎれの冗談交じりに言った。

「それにしても、僕はこれからラブをしなければならぬのに、こんなもの読まされて困ってしまいます。菊地さんはもう奥さんがいるからいいけど。」菊地さんはいつもの調子で笑ってくれた。私は、今度はまじめになって問いか

けた。「やはりひとつひとつ現実に当たってゆくよりほかないのでしょうか。」少しの間ののちに、菊地さんは何ら取り繕うことなくこう答えた。「娘の学校の体罰を知ったとき、これを見過ごしにしては、今まで自分のやってきた学問が嘘になってしまったのです。それであんな文章を送り付けることになったのです。」これが、いまなお私のところに響く、菊地さんのその言葉である。菊地さんは、純粹で厳しく、そして熱い人だった。

菊地さんはまだまだ言いたいことが山ほどあったのだから、もっと長く生きてくれなければいけなかったのだ。とはいえ、そんなそぶりを人にはちらとも見せなかったけれど、そうした無念を一番痛切に感じていたのは、菊地さんご本人にはかならない。現在、病床の菊地さんの口述を記録したテープを、奥さんが京都で文字におこされている。それをもとに、菊地さんの透谷論、兆民論、蘇峰論等をまとめて、必ず公に出したいと考えている。出版の暁には、ぜひともご一読いただきたい。

(本学講師)